

『非認知能力で人は誰でも幸せになれる』

一般社団法人 人間力認定協会

代表理事 井上智之

第1部 非認知能力を知る (30分)

- ①ご挨拶・全体の概要説明・講師紹介
- ②本日のテーマについて (はじめに)
- ③**本題スタート** 認知能力・非認知能力とは？
- ④非認知能力で最も大切な能力「自尊心」「自己肯定感」とは？
- ⑤「自尊心」「自己肯定感」の育て方
- ⑥幸せ (幸福) の定義とは？

第2部 非認知能力を育てる方法 (30分)

- ⑦子どもの認知能力を伸ばすための「指導12原則」

第3部 質疑応答 (事前に頂いた質問内容) (30分)

⑧質問1

入所施設職員です。支援する側の非認知能力を高めることの大切さを感じています。支援側の非認知能力向上について、何かアドバイスがあればお願いいたします。

⑨質問2

社会の中で生きにくさや、対人面でも様々な難しさを抱えている子供達が増えていると感じています。特に就学後の義務教育の中で苦しさを感じている子ども達に大人から伝えていきたい事(言葉)を講師の先生からお聞きしたいと思います。自分の事を好きになって生きていける子供たちが増えて欲しいと願っています。

講演内容補足

第1部 非認知能力を知る (30分) 補足

人間の総合能力 = 認知能力 + 非認知能力

認知能力 = 学力 IQ 記憶力

非認知能力 = 自尊心 社交性 協調性 思いやり やり抜く力 自制心 忍耐力など

自尊心 = 自分の人格を大切にす気持ち、また、自分の思想や言動などに自信を持ち、他からの干渉を排除する態度。プライド

自己肯定感 = 自尊心 + できない自分をも含めて受け入れる態度

自尊心を高める方法 = 興味に刺激された活動の時間の蓄積 + 信念(正義)の継続

幸福 = 「今あるものに感謝している心の状態」

不幸 = 「今ないものに執着している心の状態」

第2部 非認知能力を育てる方法 (30分) 補足

指導12原則

- ①挨拶・礼儀の徹底
- ②「やる気」を引き出す
- ③自由な発想を大切にし、想像力を鍛える
- ④学ぶ重要性を理解させる
- ⑤「あきらめない心」を育てる
- ⑥自主性を育てる
- ⑦考える習慣を身に付けさせる
- ⑧主体性を育てる
- ⑨努力と根性と忍耐を身に付けさせる
- ⑩自己表現力とコミュニケーション力を鍛える
- ⑪しっかり叱り、具体的にほめる
- ⑫劣等感を抱かせない

第3部 質疑応答 (事前に頂いた質問内容) (30分) 補足

特になし

ご挨拶 (一般社団法人人間力認定協会ホームページ代表挨拶より)

「常識とは18歳までに身につけた偏見のコレクションのことをいう」これはアインシュタインの言葉です。私たちが身につけている「常識」はもしかして、公教育にどっぷりついていた18歳までに身につけた間違った考え方のコレクションなのかもしれません。彼はこうも言っています「私の学習を妨げた唯一のものは、私が受けた教育である」

▶日本人若年者の死因1位は自殺

先進国20ヶ国で15歳の子どもたちに行ったアンケートによると「あなたは自分のことを価値がある存在だと思いますか」という問いに「はい」と答えた日本の子どもたちはわずか**7.5%**でした。諸外国の平均が80%以上であることを考えると非常に低い数字です。また、日本人の5歳ごとの死亡原因を調べた統計を見ると**15歳から39歳までの死因トップはなんと「自殺」**なのです。世界にそのような国はありません。いつの間に私たち日本人の自己肯定感はここまで下がり、生きていくことが窮屈になってしまったのでしょうか。

▶今の学校制度は明治時代のまま

今の学校制度ができたのは明治5年(1872年)のことです。それまで学校といえば武士の子どもたちが学んだ藩校と誰でも通える寺子屋でした。藩校に通うことができるのは士族だけです。人口比率で言うと数パーセントでしょう。寺小屋は今でいう私塾で身分に関係なく通うことができましたが、その内容は自由で統一した何かを教えるという場所ではありませんでした。明治政府はなぜ学制を公布したのでしょうか。目的は**富国強兵**です。簡単に言うと優秀な働き手とたくさんの兵隊を作るために学校を作ったのです。しかし、これは特別なことではありません。国が行う公教育とは本来そのようなものです。つまり**公教育の目的とは本質的に国家を維持、発展させるために必要な人間を生み出すことであり、個人の幸せを追求する目的ではありません。**

▶そもそも教育とは？

「教育」という言葉は2500年前の中国の春秋時代、孔子や孟子の時代に使われた言葉です。孔子の言葉を弟子たちがまとめた論語でもわかるように、**教育とは簡単に言うと、人の踏むべき道を説いています。**嘘をついてはいけませんよとか、お年寄りを大切にしましょうという事です。私たちにとっては**道徳とかしつけに近い感覚**かもしれません。

人は教育によって人の道を歩みだす。つまり人としての教育がなされなければ獣にもなりうるということです。**教育とは人の踏むべき道を「教え込み叩き込む」もの**なのです。それに比べエデュケーションの語源である *educere* の意味は「その子の持っている個性や能力を引き出す」ということです。

簡単に言うと**教育とは外部から叩き込むものであり、エデュケーションとは内側から引き出すものなので、両者は全く正反対のこと**なのです。明治政府が発布した学校制度は教育とエデュケーションを混同したまま「富国強兵」のスローガンのもと、偏見に満ちた学校教育制度をスタートさせたのです。福沢諭吉はその著書「文明教育論」の中で次のようなことを書いています。

▶福沢諭吉も憤慨した教育の意味

「すなわち学校は人に物を教うる所にあらず、ただその天資の発達を妨げずしてよくこれを発育するための具なり。教育の文字はなほだ穏当ならず、よろしくこれを発育と称すべきなり。かくの如く学校の本旨はいわゆる教育にあらずして、能力の発育にありとのことをもってこれが標準となし、かえりみて世間に行わるる教育の有様を察するときは、よくこの標準に適して教育の本旨に違《たが》わざるもの幾何《いくばく》あるや。我が輩の所見にては我が国教育の仕組はまったくこの旨に違えりといわざるをえず」

完全に当時の学校制度を否定していたわけですね。明治維新の後、海外に渡っていた福沢諭吉が日本に帰ってきたとき、学校をみてひどく落胆していたことがわかります。つまり、**学校とは勉強を教えるところではなく、子どもたちの天与の才を妨げず、伸ばすべきところ**なのです。

▶他者との比較が自己肯定感を低下させる

うちの子は、ほかの子と比べて成長が遅い、勉強が苦手、授業中きちんと座ってられない、忘れ物ばかりする、なかなか字を覚えないなど、子を持つ親は数えたらきりがなくらいのこどもの不足に目を奪われ不安に襲われています。しかし、考えてみてください。今いくつか挙げた例の中に福沢が言うところの本当の目的が含まれているのでしょうか。どれもこれも本来の目的とはかけ離れたところで私たち親は心を悩ませているのです。

その原因こそが学校教育制度(学制)なのです。**無数に存在する個性をいくつかの基準にあてはめ、競争を促し、評価する。**そうすることで子どもの才能が伸びるという間違った考えが百数十年の間信じられているのです。長く続いた制度のせいで、先生も私たち親も、その盲信から逃れることは容易ではありません。

▶日本の引きこもりの実情とは

日本では学校にも行かない、働きもしない、いわゆる引きこもりの若者が80万人とされています。最近ではこれに加えて中高年の引きこもりが60万人いると発表されました。自殺者の数に加え、競争に敗れたり、人間関係が嫌になったり、社会と隔絶している人たちがこれだけいる社会は決して健全とは言えません。

いじめが多いのも当たり前ではないのです。残念ながら今の日本は障がい者や社会的マイノリティに対しても優しい社会とは言えません。日本のテレビのバラエティーとチャップリンの映画を比較するとわかりやすいでしょう。どちらも笑いや涙を誘いますが、本質が全く違います。前者の根底にあるのは比較と競争です。強いものと弱いもの、賢いものと賢くないもの間に生まれるギャップの中に笑いの本質が隠されています。強い立場の人が弱い立場の人をいたぶる姿を観て、視聴者である私たちは笑っています。一方チャップリンが映画の中で作り出す笑いは、人間の滑稽さや弱さですが、その根底にあるのは愛です。

ひと昔前に「世界で一つだけの花」という曲が大ヒットしました。とてもいい曲なのですが、これを聞いて感動しているような社会ではだめなのです。この曲で言っていることは本来当たり前なことであって、これに感動するのは私たちが常日ごろ、そのことを忘れていないからではないでしょうか。この曲の詩が特別なことではなく、この国のコモンセンスになることを祈ります。

競争するのではなく協力することで、また、自己のためではなく他者のためにこそ、本来人間は無限の可能性を開花させる生き物なのです。しかし世の中はなぜ競争を煽り、比較することによって劣等感を植え付けるのでしょうか。おそらく、そのほうが儲かるし、支配できるからでしょう。そろそろ私たちの心の在り方、風潮、社会のコモンセンスを根本的に変えていかなくてはいけない時期に来ているのではないのでしょうか。

大切なのは私たちひとりひとりが意識改革をすることです。まずは**自分の在り方に目を向け、人生の目的とは、生きる意味とは何かを問い続ける**ことです。そこに目を向けられない限り、教育の目的にたどり着くことはできません。皆様が真の教育(発育・エデュケーション)によって、天与の才を存分に発揮し、幸福なる人生を選択されることを祈ります。

一般社団法人 人間力認定協会
代表理事 井上智之

講師 井上智之紹介

一般社団法人 人間力認定協会 代表理事

株式会社エルエーシーコーポレーション 代表取締役

プログラミング&コミュニケーショントレーニング教室マナカル 代表

長崎県長崎市生まれ 54歳 2児の父

1996年、学ぶことの喜びと、生きがいの創造をテーマにしたパソコン教室を開業し、直営校とフランチャイズ校を全国展開。2010年にはコミュニケーショントレーニング法マナカルメソッドを開発し、教育機関や各種教室に提供。

2018年には、すべての人間が生まれながらに持っている非認知能力（人間力）を育成認定することを目的に、「一般社団法人 人間力認定協会」を設立。「理解は支援の第一歩」をスローガンに、発達障害児への理解と支援の輪を拡げている。いじめ、ひきこもり、未成年者の自殺をなくすことを目的に開発した「児童発達支援士」「発達障害コミュニケーションサポーター」の二つの資格講座は全国に拡がり、認定した児童発達支援士、発達障害コミュニケーションサポーターの数は世界8か国で累計8391名（2021年12月現在）を超える。

井上智之 2022年行動予定

- ・全国で活躍する児童発達支援士と直に意見交換会をするため48都道府県を全国行脚
- ・児童発達支援士を講師として全国に500か所の「発育支援教室」を開校

主な著書「子育てパズル 子供が化ける親の処し方」(2019) Amazon。

*「2022年1月15日 第20回こまくさ教室公開講座」の参加者用提供資料として、同年1月10日に作成 井上智之